

学童期の自閉症スペクトラム児の集団療育における教育的ニーズの検討

- 絵本の読み聞かせ場面の分析を通して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
野田 恭世

学童期の自閉症スペクトラム児の子ども達を対象とする集団の教育や療育場面では、「個」を大事にしながら、「集団」において社会的相互交渉をはじめとする「3つ組の障害」からくる困難さにどのように働きかけるかが問われている。本研究では集団による教育場面の一つである「絵本の読み聞かせ場面」を観察対象とし、継続的に観察することで発達的な変化を明らかにすることを目的とする。その上で、「絵本の読み聞かせ場面」における自閉症スペクトラム児の教育的ニーズ、及び集団による教育場面の中で配慮すべき点について考察する。

対象児は、療育プログラムの学童期グループに参加する児童2名とした。観察場面は活動内の絵本の読み聞かせ場面とし、毎回ビデオ撮影を行った。全観察場面のうち、A児は14場面、B児は27場面を分析対象とした。分析は映像記録をもとに文字化したスクリプトを用い、対象児ごとに「絵本理解に関する発話」及び「他者関係」に視点を置き、エピソードを抽出した。

その結果、A児は描写内容を発言したりしながら一場面ごとに面白さを見出していた姿から、やがて先を予想する問いかけや次を読むよう催促をする姿が顕著に見られるようになった。B児は、絵本を介して読み手に発言したり、読み手のように自分で読んだりする姿を見せていたが、その後読み手ではなくB児の傍にいるスタッフとのやりとりが見られた。そのような時期を経て、B児は他児の盛り上がりに入っていこうとする姿が見られた。これらの結果より、A児は絵本の理解に関して発達的な変化が見られ、B児は他者との関係において発達的な変化が見られたことがわかった。

本研究の結果より、絵本の読み聞かせ場面における自閉症スペクトラム児への教育的な配慮としていくつかのことが考えられる。一つには、社会的相互交渉や他者との関係を築く上で困難を示す自閉症スペクトラム児にとっては、絵本という共通の素材を媒介に、他者と面白さや驚きを共有し合うことができる集団形成をねらいとすることが重要であると考えられた。また、徐々に場面と場面の繋がりを理解し始めた自閉症スペクトラム児にとっても、それらの理解を内へとどめさせるのではなく、広げていく関わりが必要であると考えられた。本研究では、対象児2名を同じ観察場面で継続的に観察したが、その発達的な変化が見られた次元は異なっていた。このことから、その子どもの障害特性ばかりでなく、発達のベクトルはどこを向いているのかを個々に踏まえた配慮の必要性が示唆された。また、子どもの集団の中に教育者も入り、集団の中でテーマや目標を共有しながら子ども達の相互作用が成り立つよう指導することの必要性も示唆された。